

令和4年度 栃木市教育研究所 研究所員研修会 研究記録カード

1 部会名	児童生徒指導		部 会
2 研究所員 事務所員 ◆：代表者	研究所員 ◆黒子 孝佳（栃木第三小） ・榎井 雅美（西方小）	・増山 智大（岩舟中） ・南端 文栄（東陽中）	事務所員 ・篠崎 智延 ・高瀬 智行 ・黒須 周作



3 研究テーマ

“関わり”を広げ、深めるための実践と教師の役割

4 研究の取組

（1）研究内容

児童生徒は様々な関わり（友達、先輩後輩、教員、保護者、家族、関係機関、地域、自分自身など）の中で生活している。教員自身の置かれた状況や役割について考察し、様々な関わりを良好につなげるための取組を考えたり、実践例を紹介したりしていく。また、それぞれのパイプ役として、教員はどのような取組ができるのかを話し合い、紹介していく。

（2）研究計画

月 日	研修内容	月 日	研修内容
5月6日	研究テーマ・内容の協議、計画作成	11月25日	内容の協議
6月17日	研究テーマ・内容の協議、計画作成	2月10日	内容の協議
10月3日	内容の協議	2月20日	1年次報告提出

5 研究の成果と課題

【成果】

- ・児童生徒指導、保護者対応における困ったこと（困っていること）を若手の先生等にインタビューしたことで、どのように対応すればよいか等を一緒に考えることができた。若手教員が児童生徒や保護者に対して適切に対応するには、どのような児童生徒かを広い視野で多面的に把握する力、保護者への関わり方、保護者の思いをくんだ上で対応する力が必要になってくることがわかった。
- ・児童生徒や保護者の思いに寄り添い、良好な関係づくりに努めることが大切であると再認識した。また、担任でない立場からのアプローチの仕方を考え実践したことで、校内での連携が生まれることがわかった。その中では、担任と当該児童生徒との関係性を大切にしたかわり大切であることもわかった。

【課題】

- ・課題を解決していく上で、校内の連携のみならず、関係諸機関との連携が必要な場合がある。しかし、私たちが、関係諸機関の役割や連携の仕方について十分理解できていない。

6 さらに研究していきたいこと・次年度の構想

SC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）、外部機関の役割や実際に連携して効果をあげている事例等について情報を収集し、効果的な支援について検討していきたい。